

三宅廃寺3

—福岡市埋蔵文化財調査報告書第827集—

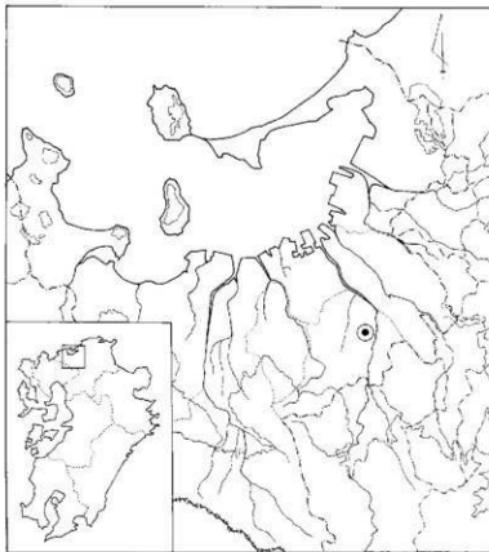
2004

福岡市教育委員会

三宅廃寺3

—個人専用住宅建設に伴う三宅廃寺第3～5次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第827集



序

福岡市は、古来より大陸との文化交流の門戸としてその歴史的役割を担い、発展してきました。そのため、本市には数多くの文化遺産が残されております。これらを保護し、後世に伝えていくことは私どもの責務であります。

本市教育委員会では、各種開発事業に伴い消滅するおそれのある埋蔵文化財については、記録保存を目的とした発掘調査を行い、それらを後世に残すよう努めています。

本書は、個人専用住宅建設工事に伴って実施した三宅廃寺第3次～第5次調査の成果を報告するもので、古代寺院跡と推定される寺域の一角を確認するとともに、須恵器や土師器、瓦類などが出土しました。これらは、地方における初期仏教の受容の在り方を知る上で貴重な資料となるものです。

本書が、文化財保護に対する理解と認識を深める一助となり、また学術研究の資料として大いにご活用いただければ幸いです。

最後となりましたが、発掘調査の実施から本書の作成に至るまで、深いご理解とご協力を賜った関係者の皆様に対して、心から謝意を表します。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例　言

1. 本書は、個人専用住宅建設に先立ち、平成14年度事業として国庫補助を受けて福岡市教育委員会が実施した三宅廃寺跡第3～5次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査番号は第3次が0249、第4次が0250、第5次が0251である。
3. 掲載した遺構番号は各調査区毎の通し番号とした。
4. 遺物番号は、調査区に関係なく通し番号とした。
5. 遺物についての説明は概略的に各遺物単位で行った。個々の遺物については、遺物観察表を参照されたい。
6. 本書で使用した地図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「福岡西南部」、福岡市発行の5,000分の1都市計画図「39 三宅」である。
7. 本書で示した方位はすべて磁北である。
8. 本書で使用した造成計画図面は、大和ハウス工業株式会社福岡支店作成の事業計画図から提供を受けた。
9. 本書に掲載した遺構及び遺物関係図は田中壽夫が実測、製図を行い、遺物写真については、大塚紀宜が撮影した。
10. 本調査に係る記録類及び出土遺物は、本市埋蔵文化財センターに収蔵保管される。
11. 本書の執筆・編集は田中が行った。

本文目次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
II.	遺跡の位置と歴史的環境	2
1.	三宅庵寺の位置と歴史的環境	2
2.	既往の調査	2
III.	発掘調査の記録	4
1.	発掘調査の概要	4
1)	調査区の位置	4
2)	各次調査の成果概要	4
2.	第3次調査	5
3.	第4次調査	7
4.	第5次調査	10
IV.	結語	18

挿図目次

第1図	三宅庵寺第3～5次調査地点と周辺遺跡(1/25,000)	3
第2図	三宅庵寺第3～5次調査地点位置図(1/5,000)	3
第3図	三宅庵寺第1～5次調査検出遺構配置図(1/500)	(折り込み)
第4図	溝SD01断面実測図(1/40)	5
第5図	第3次調査区遺構平面及び土層断面図(1/80)	6
第6図	溝SD01・02・土層断面図(1/40)	7
第7図	第4次調査区遺構平面及び土層断面図(1/80)	8
第8図	第4次調査区出土遺物実測図(1)(1/3)	8
第9図	第4次調査区出土遺物実測図(2)(1/5)	9
第10図	第5次調査1区西壁土層断面図(1/80)	10
第11図	第5次調査区遺構平面及び土層断面図(1/80)	11
第12図	第1次・5次調査区遺構配置図(1/250)	12
第13図	土坑SK02・04・08、柱穴SP20、溝SD01平面及び断面図(1/40)	13
第14図	第5次調査区出土遺物実測図(1)(1/3)	13
第15図	第5次調査区出土遺物実測図(2)(1/3)	14
第16図	第5次調査区出土遺物実測図(3)(1/5・1/3)	15
第17図	第5次調査区出土遺物実測図(4)(1/3)	16

図版目次

図版扉	三宅周辺航空写真(昭和53年当)	(5) 土坑SK08(南南西から)
図版1(1)	第3・4次調査区調査前現況(北から)	図版4(1) 第5次調査第2区完掘状況(南西から)
(2)	第5次調査区調査前現況(南西から)	(2) 溝SD03(南から)
図版2(1)	第3次調査区完掘状況(南東から)	(3) 柱穴SP20(北から)
(2)	第4次調査区完掘状況(南東から)	(4) 第3次埋め戻し状況
図版3(1)	第5次調査第1区完掘状況(南西から)	(5) 第4次埋め戻し状況
(2)	完掘状況(南南西から)	(6) 第5次埋め戻し状況
(3)	土坑SK02(南南東から)	図版5 出土遺物
(4)	土坑SK01(東から)	

表 目 次

表1	第4次調査区出土遺物観察所見表	9
表2	第5次調査区出土遺物観察所見表	17
表3	調査報告書抄録(奥付)	

I. はじめに

1. 調査に至る経過

平成14年11月1日付けて、福岡市南区南大橋1丁目1157番7及び同1157番8、並びに同1159番3における住宅建設に先立ち、埋蔵文化財の有無について照会があった。いずれも、本市文化財分布地図上で三宅庵寺（登録番号0144）として登載されている周知の埋蔵文化財包蔵地内に位置している。また、近隣地においては、民間共同住宅建設に伴う三宅庵寺第1次調査（昭和52年度実施）や、福岡県住宅供給公社旧南大橋団地跡地の宅地造成事業に伴う第2次調査（平成14年度）が実施されており、何らかの遺構が存在することが予想されたために、平成14年11月5日及び11月8日に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、いずれの地点からも奈良時代を中心とした遺構と遺物を検出したため、盛り土あるいは基礎構造の設計変更等による現状保存を依頼した。しかし、地盤が軟弱であり、耐震構造に万全を期すために基礎杭の打設工事が必要なことから、協議の結果、やむを得ず記録保存を目的とした発掘調査を行うこととした。平成14年11月28日から約1ヶ月の期間で、三宅庵寺第3～5次調査として実施することとした。

なお、事前審査受付番号、試掘調査番号及び調査番号は下記のとおりである。

	受付番号	試掘調査番号	調査番号	申請及び調査地点所在地
三宅庵寺第3次調査	14-2-545	14-179	0249	福岡市南区南大橋1丁目1157番7
三宅庵寺第4次調査	14-2-546	14-180	0250	福岡市南区南大橋1丁目1157番8
三宅庵寺第5次調査	14-2-544	14-178	0251	福岡市南区南大橋1丁目1159番3

2. 調査の組織

以上の経過を経て、発掘調査は以下の組織で国庫補助事業として実施した。

工事主体者 川野 晃（福岡市南区南大橋1丁目1157番7）
 櫻屋真一（福岡市南区南大橋1丁目1157番8）
 吉井健也（福岡市南区南大橋1丁目1159番3）

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 生田征生

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男

事前審査 事前審査係長 池崎譲二
 主任文化財主事 米倉秀紀
 文化財主事 田上勇一郎

調査担当 調査第2係 田中壽夫

調査庶務 文化財整備課管理係 御手洗清

調査作業 松永シゲ子 山崎光一 鶴ヒサ子 野口ミヨ 持丸玲子 森田祐子
 長田嘉造 野田淳一 宮崎タマ子 西田文子 山内 恵 平川正夫
 佐藤俊治

なお、調査の実施及び整理報告書作成にあたっては、施工業者である大和ハウス工業株式会社福岡支店から条件整備、図面提供等の協力を、また、川野章氏を始めとする工事主体者の皆様方には、発掘調査の実施にあたり深いご理解とご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

II. 遺跡の位置と歴史的環境

1. 三宅廃寺の位置と歴史的環境

福岡平野と早良平野を画する油山山塊は、多くの低丘陵を派生させながら平尾周辺から、若久、桧原、老司等にかけて起伏に富んだ地形を形成している。一方、背振山から東南麓から派生した那珂川は、背振ダム・南畑ダムにいったん流入した後北東流し、深く谷を開拓しながら那珂川町を経由した後、中流域で肥沃な沖積平野を形成しながら、本市南区へ流下する。さらに三宅・大橋周辺においては、福岡平野の中央部を占める那珂洪積台地に阻まれ大きく北西に流路を変え福岡平野の中央を絶て博多湾に流れこんでいる。この那珂川中流域左岸に形成された沖積平野と台地縁辺部にかけて、野多目A・B遺跡群、国指定史跡老司古墳、老司瓦窯跡、大橋E遺跡等の绳文時代から中世にわたる遺跡が点在しており、福岡平野南部において、比較的分布密度の高い地域となっている。

今回調査の対象となった三宅廃寺(0144)は、1.三宅遺跡群(2825)に包含されている。三宅遺跡群は、東西に約500m、南北に約250mの広がりを有し、主として奈良～平安時代の遺跡によって構成されている。範囲内には2.三宅瓦窯跡(0142)、4.三宅岩野瓦窯跡(0143)等の瓦窯跡、古代瓦類の散布地である大橋D遺跡(0134)、弥生時代の甕棺が出土したことで知られる3.大橋C遺跡(0133)、三宅廃寺推定の端緒となった三宅A遺跡(0135)が分布している。東側沖積微高地には、弥生時代の集落遺跡の他、古代官衙の存在が推定される6.大橋E遺跡(2382)、整然と並んだ掘立柱建物がかつて確認されたという7.三宅B遺跡(0139)などが近接している。()内の数字は遺跡登録番号である)

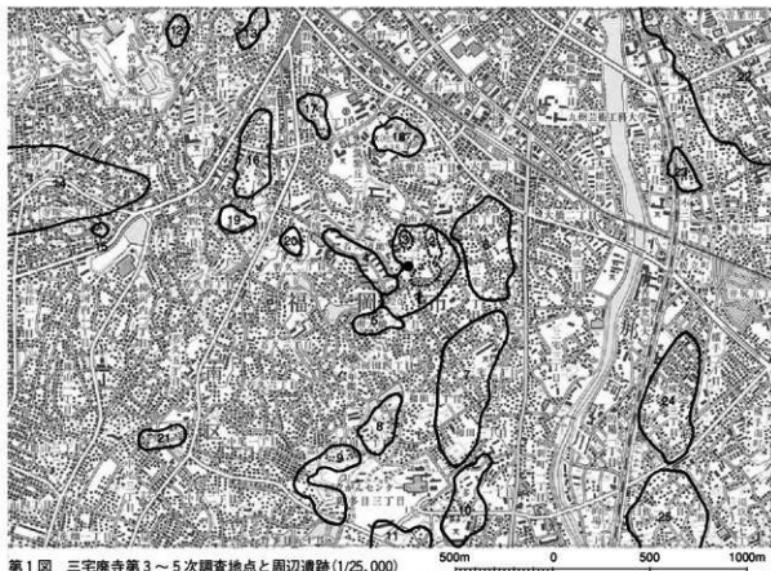
2. 既往の調査

三宅廃寺の存在について、初めて考古学的に推定したのは、昭和52年11月～53年3月にかけて実施された三宅A遺跡における民間開発事業に伴う発掘調査によってである。約1,200m²の調査の結果、南北方向に整然と配された3間×3間の大型掘立柱建物、縦柱建物、これらの建物を画する大小の溝、土坑等の遺構が確認された他、老司I式を主体とする瓦類、磚、中国産陶磁器や、「寺」「佛」等の銘がある墨書き土器、木簡、石帶巡方、黄銅製匙、箸等が出土した。寺域の推定は、周辺の古代瓦の分布状況及び調査区西側で確認された瓦溜遺構の在り方等から、大溝の東北部コーナーとみなし、方一町(約104～110m)程度の規模と推定するとともに、寺域の中心的施設は、当時の福岡県住宅供給公社南大橋団地の範囲内に想定した。

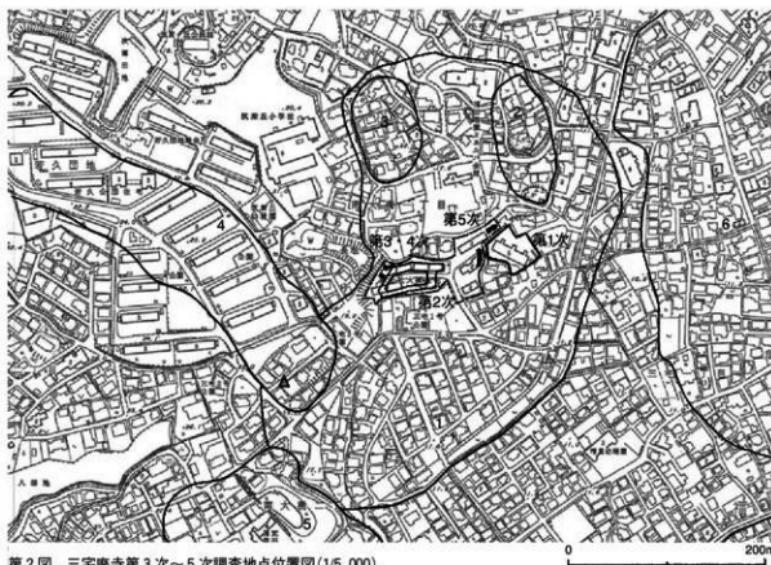
その後、平成14年1月～5月にかけて、南大橋団地跡地の再開発(宅地分譲)に伴う発掘調査が実施された。発掘調査は、新設道路部分に限られたが、第1次調査で確認された諸施設の方向性とよく合致する大型の掘立柱建物、溝、土坑等が検出された。特に東西棟及びそれに直交する南北棟の掘立柱建物群が確認されたことは、寺域範囲、規模の推定等の妥当性を検証する成果として重要である。

なお以下に、三宅廃寺関係及び周辺遺跡に係る本市埋蔵文化財調査報告書を掲げる。参考にされたい。

- 福岡市教育委員会 1979 「三宅廃寺」福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集
- 福岡市教育委員会 2004 「三宅廃寺2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第826集
- 福岡市教育委員会 1990 「公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第219集
- 福岡市教育委員会 1992 「大橋E遺跡3次調査の報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第279集
- 福岡市教育委員会 1997 「大橋E遺跡4」福岡市埋蔵文化財調査報告書第511集
- 福岡市教育委員会 2003 「大橋E遺跡5」福岡市埋蔵文化財調査報告書第740集
- 福岡市教育委員会 2004 「大橋E遺跡6」福岡市埋蔵文化財調査報告書第791集



1. 三宅道路 2. 三宅瓦窯跡 3. 大塙C道路 4. 大塙B道路 5. 和田藏池遺跡 6. 大塙E道路群 7. 三宅B遺跡 8. 和田A道路群 9. 和田B道路群 10. 野多田A道路群 11. 野多田B道路群 12. 高宮A道路 13. 高宮B道路 14. 寺坂A古墳群 15. 寺坂B古墳群 16. 中村町道路 17. 野間A道路 18. 野間B道路 19. 若久A道路 20. 若久B道路 21. 稲形原道路 22. 那珂道路群 23. 井尻A道路群 24. 橋手道路群 25. 日佐道路



III. 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要

1) 調査区の位置(第2・3図、図版図・1~3)

県住宅供給公社南大橋団地跡地の再開発は、敷地4,458m²を18区画の戸建て分譲用地として造成するもので、新設道路部分については約1023.7mについて調査を実施した(三宅庵寺第2次調査)。

今回の第3・4次調査区は分譲計画地の北西部にあたり、北西から南東方向に開析された谷の開口部中央に立地している。現地表面における周辺の台地頂部との比高差は3~4mをばかり、本来はかなり狭い谷地形であったものと思われる。第5次調査は分譲計画地の東部に位置している。当該地点は、本来、北西から南東方向に延びる尾根の末端部に位置している。対象地の南東側縁辺には農業用貯水池長池から延びる用水路が南西から北東に流下しており、それに接して第1次調査区が位置している。

第3~5次調査区は、第1次調査の結果推定された三宅庵寺推定域の外周部縁辺部に相当する地点であり、当該地点の旧地形の復元、すでに確認されている奈良から平安時代に比定されている溝や建物等の遺構群の分布状況等を明らかにすることを調査目的として実施した。

2) 各次調査の成果概要

(1) 第3次調査

調査地点は、建充分譲計画地の北西部にある。

第2次調査区の西側に接している。後世の擾乱が顕著で遺構の遺存状況はきわめて悪かった。

検出した遺構は、溝1条、及び柱穴2である。寺域推定の西側にも奈良時代の遺構がわずかではあるが存在していることがわかった。

(2) 第4次調査

第3次調査区の南側に隣接している。第3次調査区と同様遺構のはほとんどは削平されており、遺存状況は悪い。検出した遺構は溝2条、及び柱穴2である。第1次調査で推定された庵寺の推定域よりもさらに西側に遺構が展開することが予想された。

(3) 第5次調査

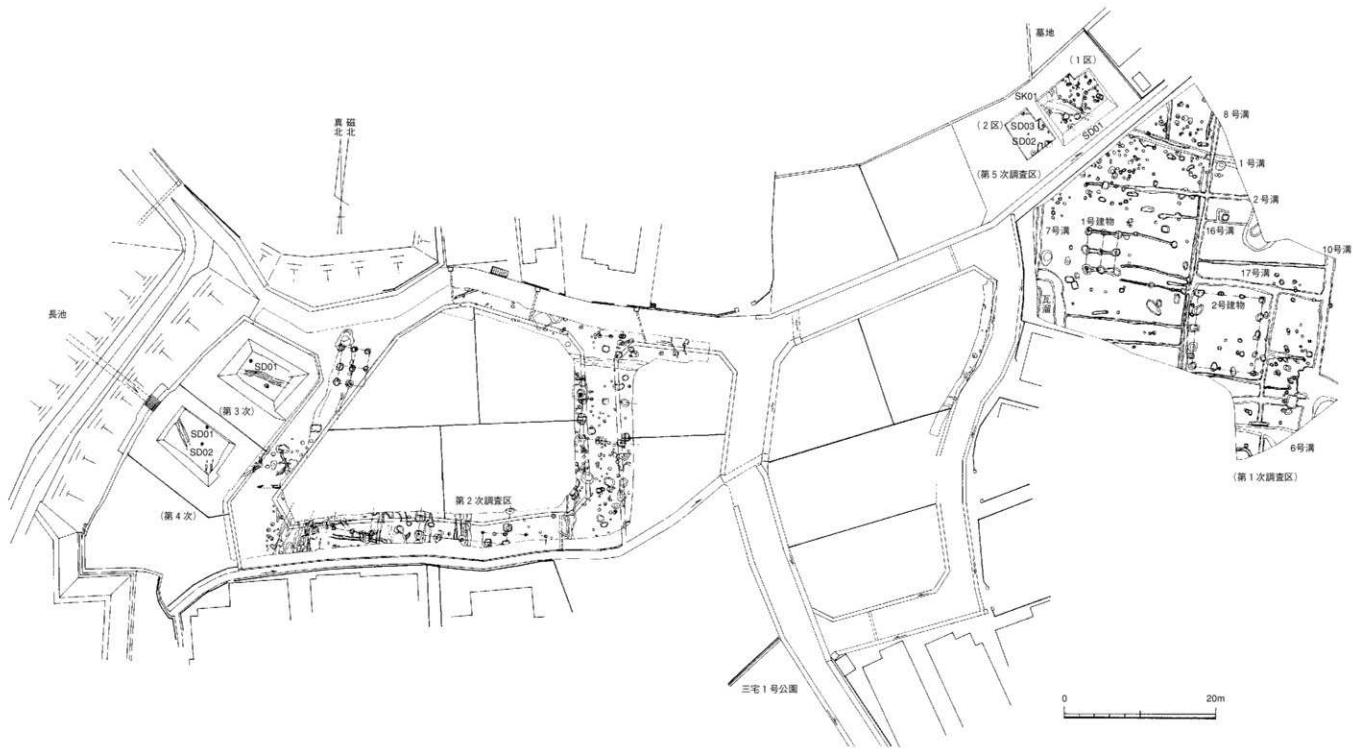
検出した遺構は、溝2条、柱穴多数、焼土坑、円形土坑などである。溝は第1次調査で確認された1号溝及び7号溝の延長部が確認できた。柱穴は大型の掘立柱建物のものもある。第1次調査成果と併せて、区画割りされた施設の一角について明らかにすることができた。遺物中に「寺」「十二」銘のある土師器、須恵器がある。



第3次調査風景(南東から)



第5次調査風景(南西から)



第3図 第1～5次調査造構配置図(1/500)

2. 第3次調査

調査は、分譲計画地北西部の一区画178.8m²を対象に、63.8m²について調査を実施した。当該地点は、本来、北西から南東方向に開析された谷部の開口部にあたり、谷最深部中央から北側斜面上に位置している。現況は、農業用貯水池長池の堤の東側に隣接しており、旧南大橋団地が存在していた頃の地盤面より1.5m以上の盛り土がなされ、造成後の地表標高は15.3~15.6mを測る。なお、調査区は第2次調査区西側と第4次調査区北東側に隣接する。

1) 遺構と遺物(第2~5図、図版1~2)

遺構の検出面は、部分的に残る遺物包含層(黒灰色粘質土)下部に堆積する、きめ細かな砂粒を含む灰色~青灰色シルト層上面である。おおむね標高12.8~13.2m前後を測る。この層の下には、厚さ70cm以上の灰色粗砂層が厚く堆積している。その下部は砂礫となり、湧水が顯著である。県公社団地の建築及び解体工事の影響で、掘削は地山までおよび、遺構の遺存状況は悪い。検出した遺構は、溝1条、及び柱穴2である。

溝SD01 幅が約40~50cm、深さ10~15cmを測る。長さ約5mについて確認した。溝の基底部がかろうじて残った状況である。断面形は浅皿状で、暗灰色シルトを埋土とする。溝の走向は西北西から東南東で、N-108°-Eを測る。第1次調査で検出された東西溝1号溝の走向N-110°-Eに近い。土師器、須恵器、瓦小片が出土している。いずれも2次堆積で磨耗し、図示し得るものはないが、8世紀半ばから後半代の遺物と思われる。

柱穴SP01 柱掘形は不整円形である。径40cm、深さ10cmを測る。暗灰色~黒灰色粘質土を埋土とする。土師器、須恵器小片が出土している。いずれも磨耗し、図示し得るものはない。

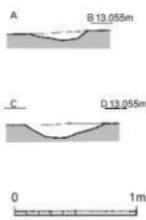
柱穴SP02 柱掘形は隅丸の不整な矩形である。一辺が58~70cmを測り、東南隅に直径26~28cmの柱痕跡がみられた。柱痕跡は黒灰色粘質土を埋土とし、瓦が出土している。柱掘形の規模等からみて、東側に接する第2次調査区で検出した掘立柱建物SB01と同規模の建物の存在が考えられる。

2) 小結

本調査区は現代の搅乱が著しく、また、調査面積狭小であったこともあり、遺構遺物はわずかな確認にとどまった。本調査区及び第2次調査で検出された遺構分布のあり方からみて、奈良時代を中心とした時期の遺構が、さらに本調査区の西側に展開していた可能性を指摘できる。



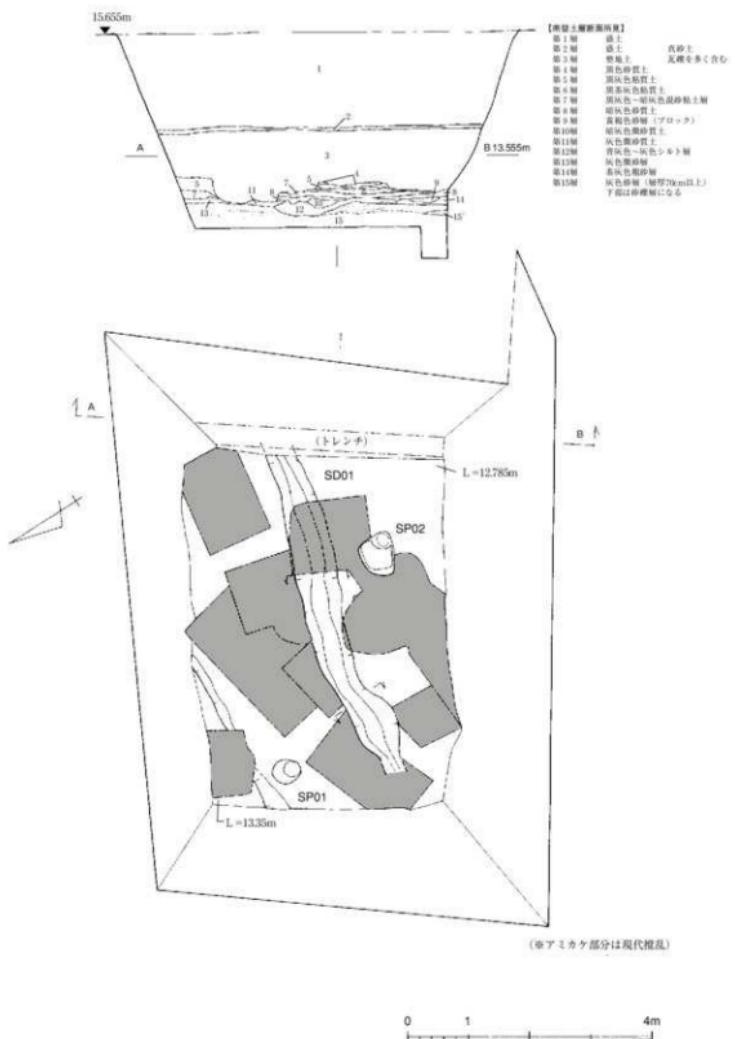
盛土状況(南東から)



第4図 溝SD01断面実測図(1/40)



SD01(東から)



第5図 第3次調査区遺構平面及び土層断面図(1/80)

3. 第4次調査

調査は、分譲計画地北西部の一区画174.47m²を対象とし、72.2m²について調査を実施した。当該地点は、第3次調査区と同様、本来、北西から南東方向に開析された谷部の開口部にあたり、谷最深部中央に位置している地点である。現況は、農業用貯水池長池の堤の東縁に隣接しており、旧南大橋団地が存在していた頃の地盤面より0.5m以上の盛り土がなされ、造成後の地表標高は14.3~14.4mである。なお、調査区は第2次調査区西側と第3次調査区南西側に隣接する。

1) 遺構と遺物(第2・3, 6~9図、図版2)

遺構の検出面は、調査区北側に部分的に残った遺物包含層(黒灰色混砂粘質土)下部の砂粒を含む灰色~青灰色シルト層上面である。おおむね標高13.2~13.4mを測る。北から南に緩やかに傾斜している。この層の下には、厚さ約30cmの黒灰色粘質土があり、さらにその下部には少なくとも50cm以上の灰色粗砂層が堆積している。基盤層は砂礫層である。第3次調査区と同様、県公社団地の建築及び解体工事の影響で、掘削は地山までおよび、遺構の遺存状況は悪い。検出した遺構は、溝2条、及び柱穴2である。

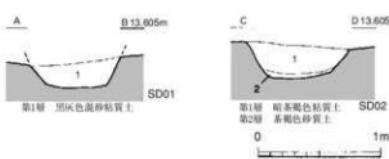
遺物包含層 調査区の中央から北西隅にかけて、硬く締まった黒灰色混砂粘質土が約10cmほどの厚さでみられた。瓦片を主として土師器・須恵器の小片が多く出土している。いずれも小片のために図示できたのはわずかであるが(第8図1~9)，主に8世紀代半ばから後半と思われる須恵器の小片である。瓦片は、格子目叩きを凸面に残す平瓦が主で、老司丸瓦瓦当片も出土している。

須恵器(1~9) いずれも宝珠形のつまみを有する壺蓋である。口径は14.0~15.0cmに、器高は1.0~2.0cmほどにおさまるもので、口縁端部が明瞭な稜線をもって引き出されている。

溝SD01 幅が約70cm、深さ15~20cmを測る。長さ約1.3mについて確認した。北側延長部は現代擾乱のため消滅している。断面形は逆台形で、黒灰色混砂粘質土を埋土とする。溝の走向は北から南で、N-6°30'~Eを測る。第1次調査で検出された東西溝7・8・10号溝の走向N-7°~8°-Eに近い。第3次調査SD01とは図面上で復元すると約75°の角度で交差する可能性がある。

出土遺物はほぼ完形になる平瓦10が1点出土したのみである。凹面には布目圧痕が、凸面には縄目叩き痕が残る。縄目叩き痕は中央から上端にかかる範囲は磨り消されている。両側縁、上下縁はヘラケズリによる調整。

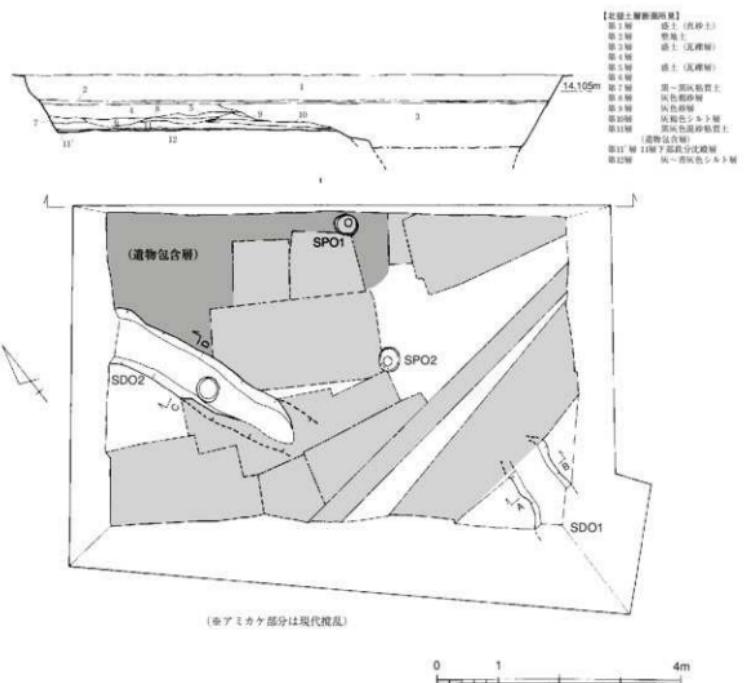
溝SD02 幅約40~50cm、深さ10~25cm、長さ約4mについて確認した。遺物包含層を切っており、溝SD01よりも後出のものと思われる。溝の走向は北西から南東方向で、N-163°30'~Eを測り、谷が聞く方向とほぼ平行しており、第1次及び第2次調査で確認された建物群等の方向とは大きくずれている。溝断面形は逆台形で、暗茶褐色粘質土を埋土とする。土師器、須恵器が少量、縄目及び格子目瓦(平瓦)が出土している。いずれも2次堆積である。



第6図 溝SD01・02土層断面図(1/40)



調査区北側溝SD02検出状況(南東から)



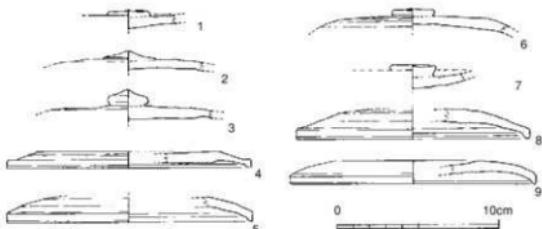
第7図 第4次調査区遺構平面及び土層断面図(1/80)

柱穴 SP01・02 遺物包含層を切っている。柱掘形はいずれも円形で、径25~30cmを測る。

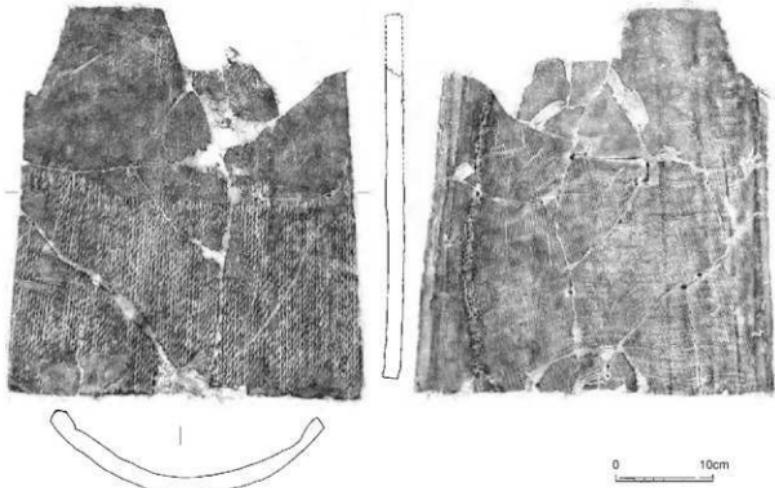
2) 小結

本調査区は、第3次調査区と同様、ほぼ全面にわたって搅乱がおよんでいたため、確認できた遺構・遺物はわずかであり、遺存状況もよくなかった。

したがって、本地点の遺構の密度等の本来の状況については明確でないが、検出された遺構の内、SD01はその方向性と埋土等の共通性からみて、第1次、第2次調査で確認された奈良時代の遺構群の一つであろうと考えられる。その他の遺構については、時期がやや下る可能性がある。



第8図 第4次調査区出土遺物実測図(1)(1/3)



第9図 第4次調査区出土遺物実測図(2)(1/5)

表1 据載遺物観察所見一覧表(第4次調査)

品番 番号	遺物 種類	遺物名	部 位	法 量 (cm)	地 土	状 成	色 調	表面調整・成形上 の特徴	備 考	
1	—	北側瓦合型 (黒灰色砂質土)	田畠部 瓦蓋	口 縁 漆 面	— 実井縫 — 実井高 光井縫	2.4 0.9mm 前縫の砂粒 を含む。稍良。	直く焼き縮まって おり。硬質	灰色	天井部内面は焼ナメ —	
2	—	北側瓦合型 (黒灰色砂質土)	田畠部 瓦蓋	口 縁 漆 面	— 実井縫 — 実井高 光井縫	2.9 0.5mm 前縫の砂粒 を含む。稍良	直く焼き縮まって おり。硬質	灰-暗灰色	天井部内面は焼ナメ —	
3	—	北側瓦合型 (黒灰色砂質土)	田畠部 瓦蓋	口 縁 漆 面	— 実井縫 — 実井高 光井縫	2.4 10.0mm 前縫の砂粒 を含む。稍良	直く焼き縮まって おり。硬質	灰色	天井部内面は焼ナメ —	
4	—	北側瓦合型 (黒灰色砂質土)	田畠部 瓦蓋	口 縁 漆 面	— 実井縫 — 実井高 光井縫	15.0 実井縫 1.0- 実井高 12.4 -	0.5-1.0mm 前縫の 砂粒を含む。稍良	直く焼き縮まって おり。硬質	暗灰色	天井部外周はヘラケ ヌリか
5	—	北側瓦合型 (黒灰色砂質土)	田畠部 瓦蓋	口 縁 漆 面	— 実井縫 — 実井高 光井縫	15.1 実井縫 1.6- 実井高 10.2- —	曲線的な砂粒を含む。 稍良	直く焼き縮まって おり。硬質	灰色	天井部外周はヘラケ ヌリか
6	—	北側瓦合型 (黒灰色砂質土)	田畠部 瓦蓋	口 縁 漆 面	— 実井縫 — 実井高 光井縫	2.6 0.5mm 前縫の砂粒 を含む。稍良	直く焼き縮まって おり。硬質	灰色	天井部外周はヘラケ ヌリ。斜板ナメ	
7	—	北側瓦合型 (黒灰色砂質土)	田畠部 瓦蓋	口 縁 漆 面	— 実井縫 — 実井高 光井縫	2.8 実井縫 1.8- 実井高 8.0- —	0.5mm 前縫の砂粒 を含む。稍良	直く焼き縮まって おり。硬質	天井部内面は焼ナメ —	
8	—	北側瓦合型 (黒灰色砂質土)	田畠部 瓦蓋	口 縁 漆 面	— 実井縫 — 実井高 光井縫	14.6 実井縫 1.8- 実井高 8.0- —	0.5-2.0mm 前縫の 砂粒を含む。稍良	直く焼き縮まって おり。硬質	天井部外周はヘラケ ヌリ。斜板ナメ	
9	—	北側瓦合型 (黒灰色砂質土)	田畠部 瓦蓋	口 縁 漆 面	— 実井縫 — 実井高 光井縫	15.2 実井縫 1.5- 実井高 9.4- —	0.5mm 前縫の砂粒 を含む。稍良	直く焼き縮まって おり。硬質	天井部外周はヘラケ ヌリ。斜板ナメ	
10	漆 SD01	黒灰色砂質土壁	瓦	平瓦 尖頂	現行長 現行幅 厚さ	38.7 31.1 —	2.0-3.0mm の砂 粒を多く含む。	直く焼き縮まるが やや脆い	暗灰色 表面 布目 裏面 脬目	

4. 第5次調査

調査は、分譲計画地北東部の一区画276.11m²を対象として、1区と2区に分けて92.7m²について調査を実施した。当該地点は、本来、北西から南東方向に延びる尾根の末端部に位置している。第1次調査区は南東側に位置している。現況地表面(標高13.5m)を基準にすると第1次調査区とは約1.3mほど一段高くなっている。

1) 遺構と遺物(第3、10~17図、図版3・4、表2)

遺構の検出面は、硬く締まった基盤土である黄褐色~明褐色粘質土である。検出面の標高は11.8~12.1mを測り、おむね北西から南東に向て緩やかに傾斜している。調査区北東側には、暗褐色~暗灰褐色粘質土が5~15cmほどの厚さで分布し、奈良期の遺物を多く含んでいる。SK02等の一部の遺構はこの包含層を切っている。遺構の遺存状況は第3次・4次調査区と比較し良好であるが、調査区南西側は擾乱が顕著である。検出遺構は、溝3条、土坑4基及び柱穴54である。

溝SD01 2区南西隅から東側中央にかけて確認された。西北西から東南東へ延びている。幅1.2~1.9m、深さ0.45~0.5mを測り、断面形は逆台形である。埋土は大きく2層に分かれる。第11図1区土層断面図では第21層下面が基底面となり、東側に向かって低くなっている。第1次調査で検出された1号溝の延長部にあたる。

遺物は第1層下部で比較的多く出土した。土師器壺、皿、椀、壺、須恵器の他、瓦が出土している。いずれも2次堆積で磨耗しており、図示できるものは少ない(遺物観察所見は表2を参照されたい)。

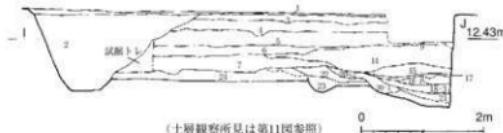
土師器 壺11は、内底と外底にヘラ記号「十」がみられる。14は体部が直線的に引き出される。皿12は体部はかなり外傾し大きく開く。13の底部はヘラミガキされている。椀16・17はいずれも高台部である。16は体部と高台が一体的である。体部は直線的に外傾するものと思われる。17は高台が斜めに広く引き出されている。体部はやや丸みを持つ。壺18・19の体部内面は斜方向のヘラケズリが施され、口縁部との境は明瞭である。

須恵器 壺15は底部片である。底部外面は回転ヘラキリ後軽くナデしている。

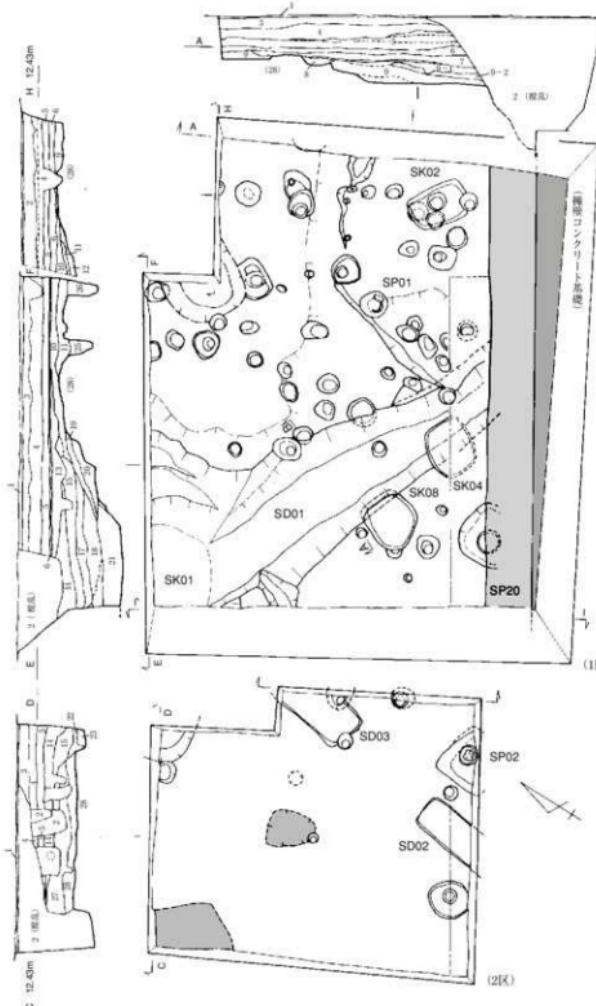
溝SD02・03 2区北壁から東壁にかけて検出。幅0.6~0.7m、深さ0.1~0.25mを測る。上部は削平されており遺存状況は良くない。いずれも埋土は茶褐色粘質土である。SD02は第1次調査7号溝の延長部と考えられ、SD03とは1.72mの間をもってほぼ同一方向のN-6°-Eをとる。遺物は土師器の小片が出土している。

土坑SK01 1区南西隅と2区北西隅にかかる。平面形は不整な直径約4mほどの円形である。第11図1区土層断面図の第18層下面が基底面である。遺構検出面からの深さは約80cm。断面形は浅皿状である。掘形北壁は階段状となっており、湧水点を利用し溝SD01と並行もしくはその後に掘削されて併せて使用された水利施設と考えられる。遺物は北東壁側にまとまって土師器・須恵器・瓦片・輪羽口が出土。ほとんどが小片である。

土師器椀20は高台部片である。壺21・22・24・25・33・34はいずれも底部は回転ヘラ切り離しであるが、24は底部から体部下端の成形は回転ヘラケズリ。口径は22が16.2cm、他は12.9~13.5cmにほぼおさまる。皿35は18層から出土。口径16cm。底部は回転ヘラ切り離しによる。壺23・27~29はいずれも体部内面の成形はヘラケズリによる。23・27は小型である。内黒土器椀26の体部はやや丸みを帯びる。口径は肥厚しわずかに外反する。外面は下半までヘラケズリにより成形され、墨書きで「十二」の銘がある。須恵器壺蓋30は4層

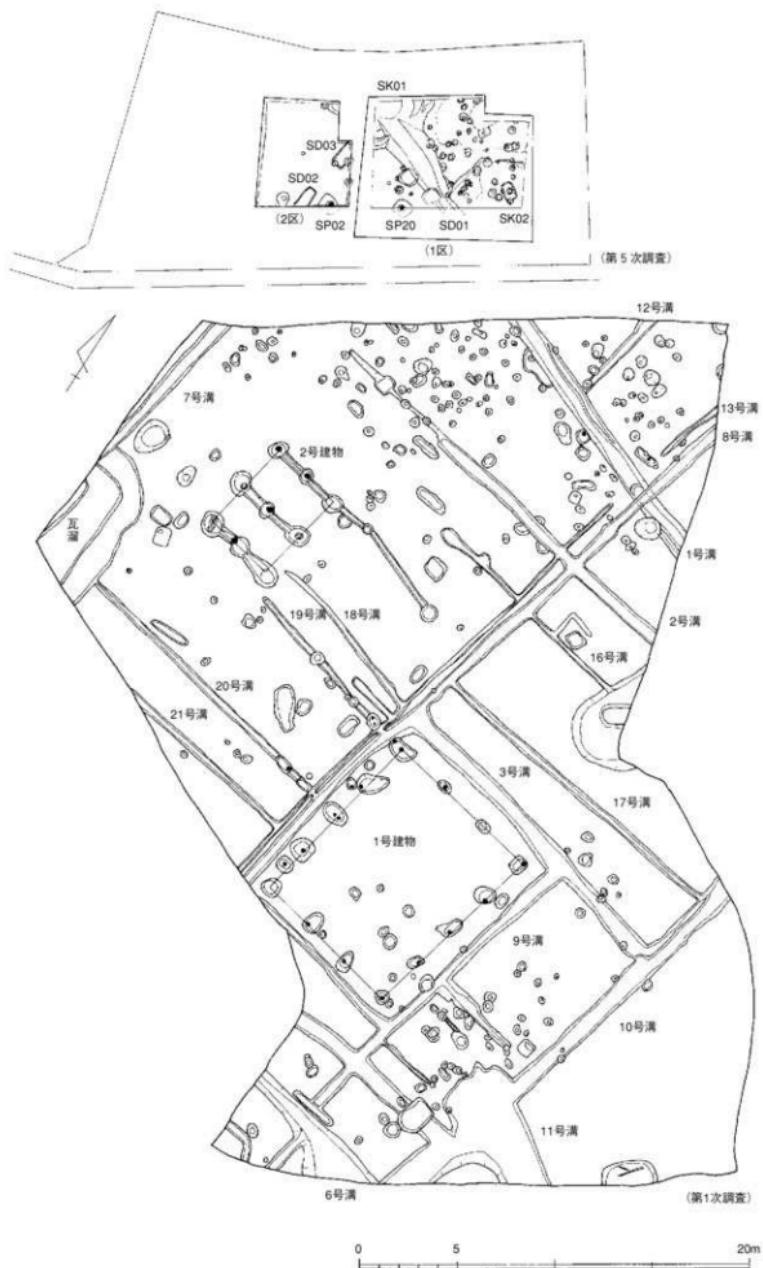


第10図 第5次調査1区西壁土層断面図(1/80)



(※アミカケ部分は現代堆積)

第11図 第5次調査区造構平面及び土層断面図(1/80)



第12図 第1次・5次調査区構造配置図(1/250)

出土。皿又は盤の底部片と思われる36の内外面には、ヘラ書きによる「寺」の銘がある。坏身37は基底部で出土。32は輪羽口片で、小口端部の周りに炭化物が付着する。平瓦38・39は凸面に縦目叩痕が、41・42には格子目叩痕が残る。各瓦の内面には桶板痕及び布目痕が残る。丸瓦40は玉縁部分の破片で、凸面には縦目叩痕が残る。

土坑 SK02 長さ1.02m、幅0.68m、深さ0.1~0.15mを測る。遺物包含層を切っている。埋土は暗灰褐色粘質土で木炭片、赤褐色の焦土小塊を含む。南壁面は火を受け硬化し赤褐色。鍛冶炉の可能性がある。遺物には、土師器坏45、皿46、甕47の他、瓦片が出土している。

土坑 SK03 長さ1.1m、幅0.79m、深さ0.08~0.10mを測る。埋土は暗灰褐色~暗褐色粘質土で木炭片を若干含む。溝 SD01を切っている。

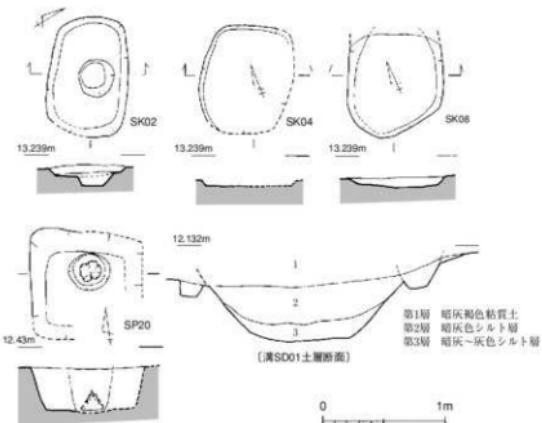
土坑 SK04 長さ0.93m、幅0.76m、深さ0.08mを測る。上部をかなり削平されており基底部のみ遺存している。埋土は暗灰褐色~暗褐色粘質土で、溝 SD01を切っている。遺物には、土師器碗48が出土している。

柱穴 柱穴は54検出した。分布は1区に偏っており、特に溝 SD01北側に分布密度が濃い。方形掘形を有するSP01・21以外はほとんどが直径0.2~0.4mの不整な円形掘形である。SP01・21は一辺約0.9mの方形掘形で、1次調査1号建物柱掘形の規模に等しい。SP21には、現存直径0.25mの柱根が残る。樹種はカヤである。なお柱穴群については調査段階で建物復元を試みたが、調査区が狭小なため、柱間の関連づけはできなかつた。SP01からは、平瓦43、瓦磈44、土師器坏49が出土。43は凸面に格子目叩痕が、44には板目痕が残る。SP08からは土師器碗50が、SP16からは土師器甕51が出土している。

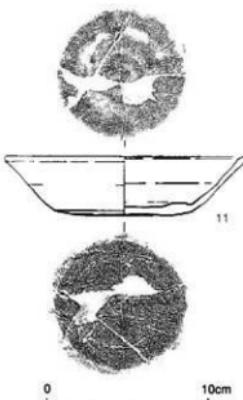
調査区北東側に分布する遺物包含層からは、土師器皿52・53、高台付皿61、坏54~56、椀57~60、甕62~65、甕又は瓶の取っ手片66~68、高台付盤69、須恵器皿70、椀71、坏72、鉢73が出土している。

2) 小結

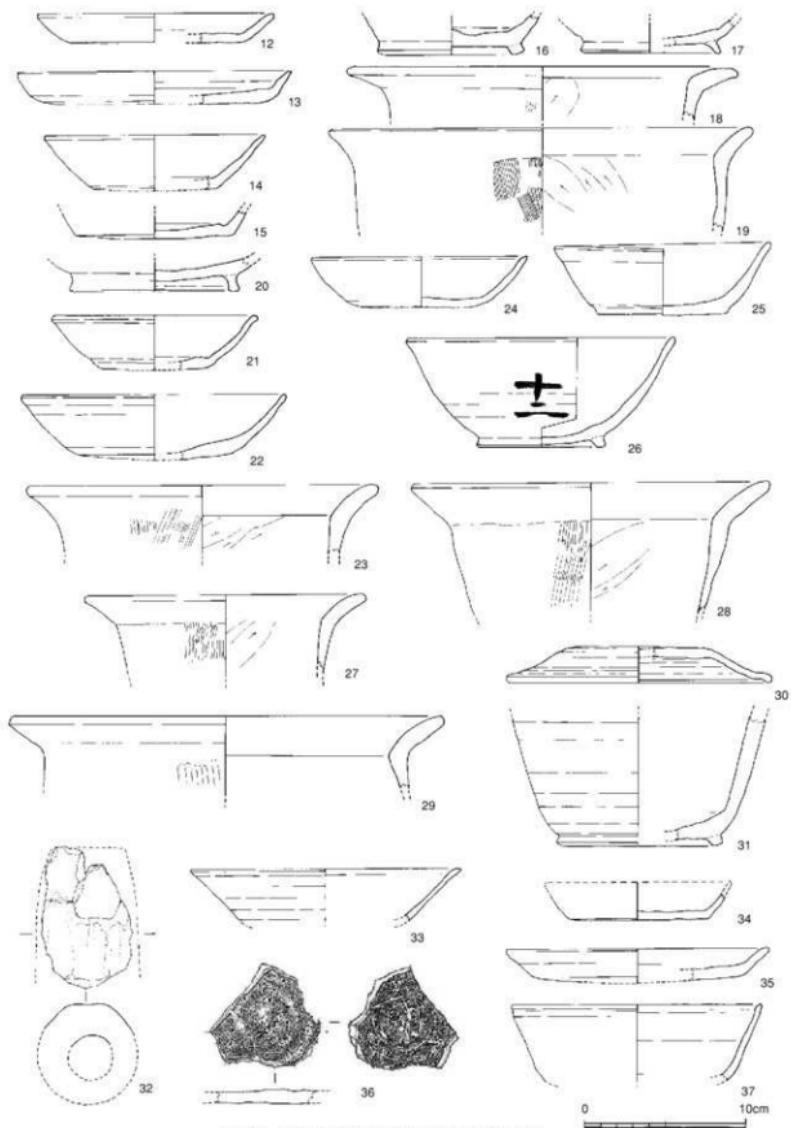
本調査区では第1次調査1号溝と7号溝の延長部と考えられるSD01・02の他、SK01等の遺構が比較的良好な遺存状況で確認された。これらの遺構は切り合い関係からみて大きく4期に区分できる。すなわち、1期はSD01が設定掘削される時期、ほどなくSK01が掘削される。2期は新たにSD02・03が設定される時期、3期は北東部包含層の形成時期、4期が包含層形成後掘削されたSK02・03が設けられる時期である。柱穴群は、2期~4期にまたがるものと思われる。各期の時期については、第1次調査成果及び出土遺物からみて、1~2期が8世紀半ば~末、3~4期が9世紀半ばまでと推定できる。



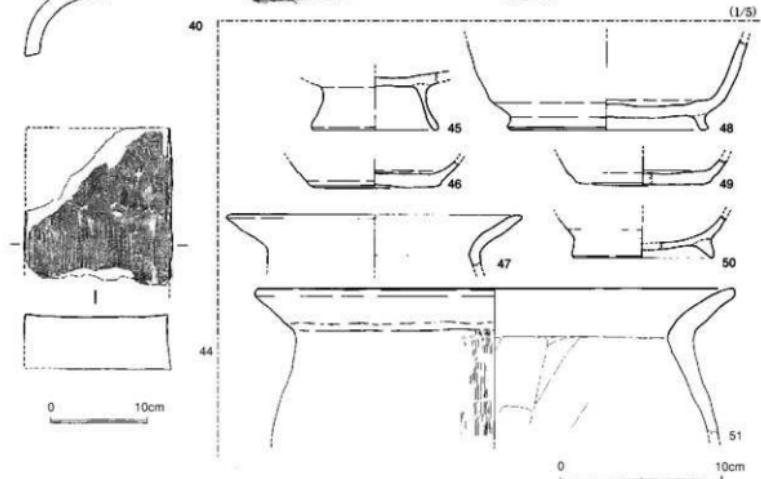
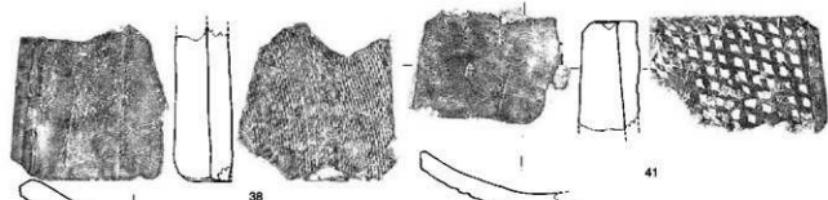
第13図 土坑 SK02・04・08、柱穴 SP20、溝 SD01平面及び断面図(1/40)



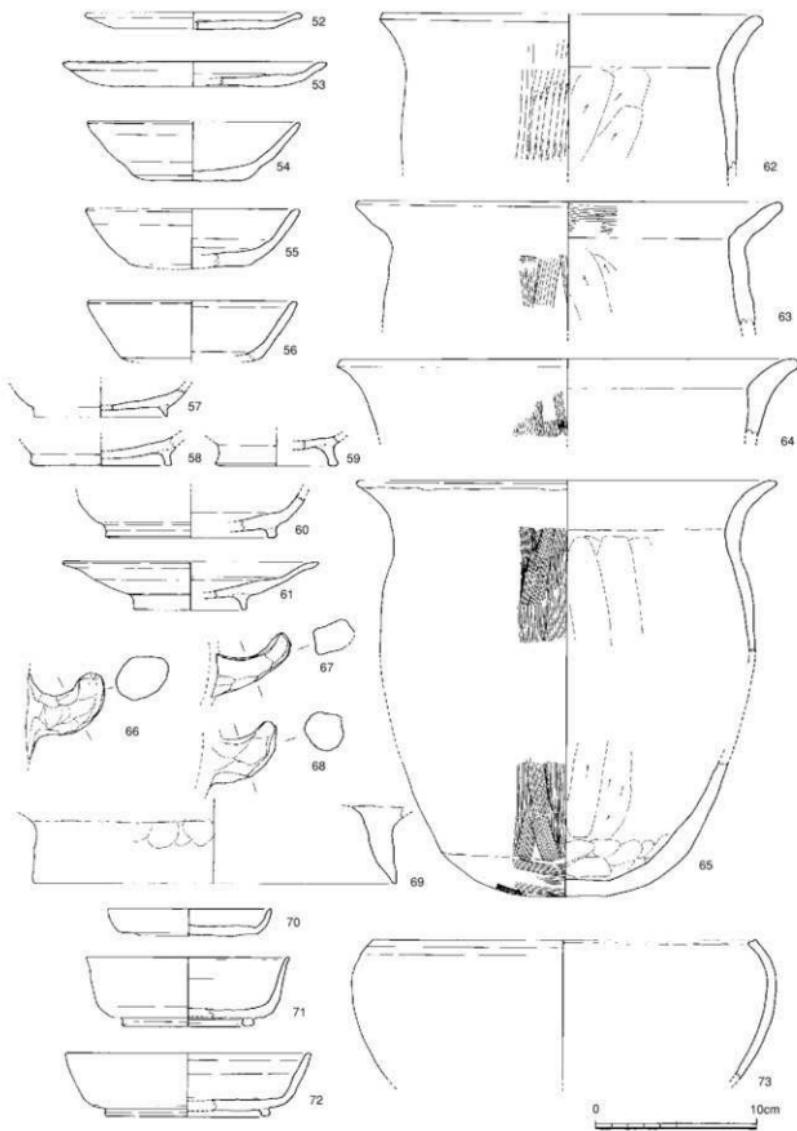
第14図 第5次調査区出土遺物実測図(1)(1/3)



第15図 第5次調査区出土遺物実測図(2)(1/3)



第16図 第5次調査区出土遺物実測図 (3) (1/5・1/3)



第17図 第5次調査区出土遺物実測図(4) (1/3)

表2 摺載遺物觀察所見一覽表(第5次調查)

IV. 結語

前章で調査所見について述べてきたが、以下では今回の調査結果を踏まえながら若干の考察を加えまとめとしたい。

1. 調査結果

- 1) 第3次・4次調査区では、これまでの調査で検出された奈良時代に相当する遺構として2条の溝を確認し、当該期の遺構が、長池の土手近辺まで広く展開していることが明らかとなった。さらに長池内にも存在する可能性がある。
- 2) 第5次調査区では、第1次1号溝、7号溝の延長部がそれぞれ確認できた他、大型建物の存在を想定しうる柱穴、および土坑等を確認でき、北西側から北側に隣接する台地際まで遺構が展開していることがわかった。なお切り合い関係からみてこれらの遺構は大きく4時期に区分することができた。各遺構からの出土遺物は、おむね8世紀半ば～9世紀前半代におさまることから、1・2期が奈良時代、3・4期が平安時代以降と考えられる。
- 3) 第5次調査の2)の結果、本來東南東に延びていた丘陵尾根根部の造成工事が、少なくとも奈良時代までには行われ、山麓まで平坦化されていたことがわかった。なお隣接する台地との現状における高差は最大で約5mあり、かなり大規模な造成が施工されたことが推定される。
- 4) 第3・4次と第5次調査区における遺構検出面は、順に12.8～13.2m、13.2～13.4m、11.8～12.1mであり、東西間約120m以上の距離をもって約1m前後の高差がある。本来は陥没した谷が入り組んでいたであろう当該地点に、ほとんど高低差がない平坦面が存在していたことが考えられる。

2. これまでの調査成果からみた検出遺構の配置

昭和52年度に実施された第1次調査によって三宅廃寺の寺域範囲は、調査区の西南部で検出した溝のコーナーを方形地割の北東角とみなし、古瓦の分布や地形のあり方からみて一辺100～110m規模を想定した。位置については、旧南大橋団地敷地を中心として三宅1号公園にかかる範囲が考えられている。築造時期は、老司式瓦の年代観から7世紀後半から8世紀前半と想定し、一方、第1次調査区で検出された1号溝と11号溝をのぞいた溝群と1号・2号建物および溝群については、中心施設周縁部に配された遺構と考え8世紀後半～9世紀代とした。これらから、三宅廃寺そのものの存続期間を7世紀後半から9世紀代にかかると考えた。^(注)

今回の調査地点は、この推定が正しいとすると、第3次および第4次調査区がこの推定域の西側、第5次調査区が北東側に位置し、それぞれ周縁部分に相当することになる。以下では、今回確認された各遺構の配置についてみてみる。

第1次から今回までの調査で検出された各遺構の方位角度は、磁北を基準とすると、大きく2グループに分かれる。Aグループは磁北からN-9°～Eをとる遺構群で、これにほぼ並行もしくは直交する第3次溝SD01、第1次1号溝およびその延長部の第5次溝SD01、第2次溝SD01である。これらは次のBグループに先行するものである。Bグループは、磁北または磁北から±1°前後東西に振れるまたはこれに直交する遺構群で、第4次SD01、第5次SD02・03、第1次及び第2次調査の建物及びこれに付属する溝群が該当する。これらから、第3～5次調査で確認された遺構は、一連の平面企画で配された遺構群であることが理解できる。

ところで、A群で注目されるのは、約100mほど離れた地点に位置する第1次SD01、第5次SD01と第2次SD02がほぼ直交する点である。初期の段階の方形地割りを物語るものと考えられるが、当該期の建物等の遺構はこれまでの調査では確認できていない。Bグループの遺構群は若干の振はあるもののほぼ磁北を軸とし、きわめて整然とした平面企画の下で諸施設が配置されたことが想起されるが、第1次調査で確認され三宅廃寺推定の根拠となった瓦溜遺構と呼ばれた溝状遺構は、これらの平面企画からはずれているように見える。当該溝の延長部および中心的施設部分の調査が不十分な現段階では、三宅廃寺の存否および場所の比定については、いましばらく周辺調査の増加を待って検討する余地があると考えられ、今後の調査に期待したい。

(注) 福岡市教育委員会 1979 『三宅廃寺』福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集

図 版



三宅周辺航空写真(昭和53年当時 東から)

図版 1



(1) 第3・4次調査区調査前現況(北から)



(2) 第5次調査区調査前現況(南西から)

図版2



(1) 第3次調査区発掘状況(南東から)



(2) 第4次調査区発掘状況(南東から)

図版3



(1) 第5次調査第1区完掘状況(南西から)



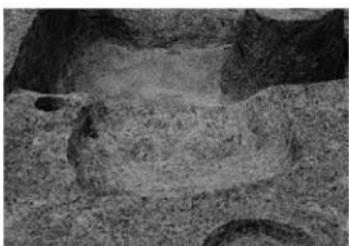
(2) 完掘状況(南南西から)



(3) 土坑SKO2(南南東から)



(4) 土坑SK01(東から)



(5) 土坑SK08(南南西から)

図版4



(1) 第5次調査第2区発掘状況(南西から)



(2) 溝SD03(南から)



(3) 柱穴SP20(北から)



(4) 第3次埋め戻し状況



(5) 第4次埋め戻し状況

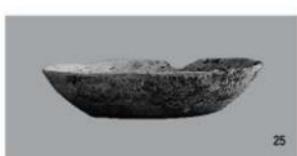


(6) 第5次埋め戻し状況

図版 5



24



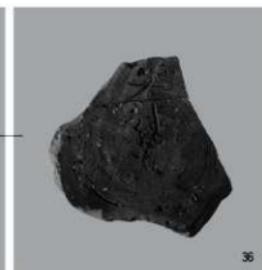
25



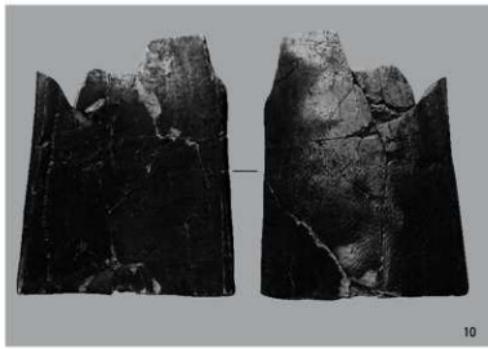
26



44



36



10

報告書抄録

ふりがな	みやけはいじ							
書名	三宅庵寺3							
副書名	個人専用住宅建設に伴う三宅庵寺第3～5次調査の報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第827集							
編著者名	田中壽夫							
編集機関	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課							
所在地	〒810-8620 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みやけはいじ 三宅庵寺 第3次調査	みやけはいじ 福岡県福岡市南区 おおはし 大橋1丁目1157-7	40134	0144	33° 33' 1''	130° 25' 28''	2002年 11月28日～ 12月16日	63.8m ²	個人専用 住宅建設
みやけはいじ 三宅庵寺 第4次調査	みやけはいじ 福岡県福岡市南区 おおはし 大橋1丁目1157-8	40134	0144	33° 33' 2''	130° 25' 27''	2002年 12月17日～ 12月26日	72.7m ²	個人専用 住宅建設
みやけはいじ 三宅庵寺 第5次調査	みやけはいじ 福岡県福岡市南区 おおはし 大橋1丁目1157-3	40134	0144	33° 33' 2''	130° 25' 30''	2002年 12月18日～ 2003年 1月8日	92.7m ²	個人専用 住宅建設
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
三宅庵寺 第3次調査	寺院跡	奈良時代 平安時代	溝1 柱穴2	須恵器 土師器 瓦				
三宅庵寺 第4次調査	寺院跡	奈良時代 平安時代	溝2 柱穴2	須恵器 土師器 瓦				
三宅庵寺 第5次調査	寺院跡	奈良時代 平安時代	溝3 柱穴54 土坑4	須恵器 土師器 瓦 須恵器 土師器 墨書き 土器 瓦				

三宅庵寺3

—福岡市埋蔵文化財調査報告書第827集—

発行年 2004年3月31日

発行者 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 高松印刷有限公司

福岡市東区松島1丁目4-10

Miyake haiji 3

— The 3rd ~ 5th excavation Results of the ruins of ancient temple "Miyake haiji" —

Cultural property investigation report of Fukuoka city, Vol.827



2004

The Boards of Education of Fukuoka city